

説 教

聖日礼拝

北浜チャーチ

2021年10月24日(日)


黒田 禎一郎

主 題：「神の摂理を見る目」

—みことばへの信仰—

テキスト：第2ペテロの手紙3章3～7節

### はじめに

- ・皆さん！ 昔から日米では、野球は人気のスポーツの1つですね。最近では米国で活躍中の日本人大谷翔平選手の人気は、もう大変なものです。ネットをクリックすると、はじめに「大谷翔平選手速報」というものがヒットしてきます。何しろ「二刀流」というわざで、日本はもとより海外で注目が寄せられています。
- 
- ・少し前でしたが、あるプロ野球選手が大リーグで活躍したいという願いを持っていました。そこであるコーチにバッティング指導を受けることになりました。それまでプロ選手として活躍していましたが、コーチのアドバイスで従来のバッティング法が、変更することになりました。その結果、良い結果を出すようになったそうです。選手はコーチの「一言のアドバイス」を聞き、それは自分にとって「目からうろこ」でした、と語りました。
  - ・皆さんは「目からうろこ」という「ことわざ」を御存じでしょう。正確には「目からうろこが落ちる」という言葉ですが、これは聖書の使徒の働き9章から来ていると言われています。{ことわざ辞典：学研辞典第2版}
 

9:18 するとただちに、サウロの目から鱗のような物が落ちて、目が見えるようになった。
  - ・私たちは聖書を開いて読んでいます。また聖書からメッセージを聞いています。しかしある時、聖書のみことばが心に語りかけるかのように入ることがあります。それは神の御霊が働いてくださり、新しい視点を見させてくださるからです。まさしく「目からうろこ」であります。
  - ・神は私たちに、そのようにお語りくださることがあります。そこで大切なことは、「神の摂理を見る目」です。今から約2千年前、当時の世界においても偽教師、偽預言者が現れ、聖徒たちの目は肉の欲に誘われていました。今の時代も、私たちが誤った方向へ導こうとする偽教師はいます。異端の教えが盛んに

働く現代です。そこで、私たちはどのような目を持って見るかは大切なことです。今日は題して、「神の摂理を見る目」と出してメッセージをさせていただきます。 2点

### 大切なポイント

#### 1. 心に覚えること

3:3 まず第一に、心得ておきなさい。終わりの時に、嘲る者たちが現れて嘲り、自分たちの欲望に従いながら、

3:4 こう言います。「彼の来臨の約束はどこにあるのか。父たちが眠りについた後も、すべてが創造のはじめからのままではないか。」

#### 1) 「終わりの時」のはじまり

- ・「終わりの時」とは、終末の時とも言われます。終わりの時と聞くと、ただならぬ出来事、天地異変が伴う恐ろしい時を真っ先に連想するかもしれません。すべてが終わってしまう時であるかのように。
- ・聖書がいう終わりの時とは、私たちにとって「はじまりの時」です。それは神が約束してくださった神の御国の訪れ、御国の完成の時を意味しているからです。それまでは正直者が馬鹿を見る、この世の不条理がまかり通ってきた現実ですが、それに対して神の義が示される時であります。
- ・ですから神を信じる者にとっては、「神の義のおとずれ」を内容とする「終わりの時」を待ち望みつつ、今をどう生きるかを正しく見極めてゆくことが求められます。
- ・いかがでしょうか。私たちは普通、現在という現状から将来を考えるものです。それは大切なことです。あるいは自分がこれまで歩んできた過去と言う視点から、現在と将来を考えることも大切なことです。しかし聖書はもう一つの視点、すなわち将来（終わりの時）から今を見るという視点を教えてくれています。
- ・神の子羊イエス・キリストによって罪が洗い清められた聖徒には、天の御国に入るという約束が与えられています。その地点から自分を見る時に、神のご摂理について知ることができるようになります。神は陶器師のように、器（私たち聖徒）をご自分の気にいる作品として作り上げてくださるお方です。
- ・エレミヤ書 18 章を開きましょう。

18:1 【主】からエレミヤに、このようなことばがあった。

18:2 「立って、陶器師の家に下れ。そこで、あなたにわたしのことばを聞かせる。」

18:3 私が陶器師の家に下って行くと、見よ、彼はろくろで仕事をしているところだった。

18:4 陶器師が粘土で制作中の器は、彼の手で壊されたが、それは再び、陶器

師自身の気に入るほかの器に作り替えられた。

18:5 それから、私に次のような【主】のことばがあった。

18:6 「イスラエルの家よ、わたしがこの陶器師のように、あなたがたにすることはできないだろうか——【主】のことば——。見よ。粘土が陶器師の手の中にあるように、イスラエルの家よ、あなたがたはわたしの手の中にある。

- ・神はまことの陶器師です。私たちは霊的には、イスラエルの民のような立場にあります。もう一度18：6を読みます。

18:6 「イスラエルの家よ、わたしがこの陶器師のように、あなたがたにすることはできないだろうか——【主】のことば——。見よ。粘土が陶器師の手の中にあるように、イスラエルの家よ、あなたがたはわたしの手の中にある。

- ・神は私たちをご自分の民としてくださり、私たちの「やがて」の「完成された姿」を見ておられます。

① 主イエスは、あのペテロが最後の晩餐の後に、つまづく将来を御存じでした。彼の弱さとつまづきを、彼以上にご存じでした。そしてペテロをじっと見ておられました。

② しかし同時に、彼がやがて立ち直り、主を愛し、そして殉教の死に至るまで忠実なしもべであることもご存じでした。将来を見つめておられました。神は「やがて」(将来)を見つめておられました。

- ・この奥義は私たちにも当てはまります。主は、今の欠けの多い自分だけでなく、主のお取り扱いの中で、成長し、整えられていく「やがての私」を見つめてくださっています。皆さん。今の自分だけを見つめて、落胆する必要はありません。自分の足りなさを嘆く必要もありません。すでに神はみわざを備えておられるのですから。

- ・このように、世の「終わりの時」を主にあって「はじまりの時」として見つめることは大切です。そして「やがての私」を見つめることも大切です。いかがでしょうか。私たちは、どんな見方をしているのでしょうか。自問自答しようではありませんか。

## 2) 神の恵みを覚えなさい

- ・ペテロは第2の手紙を通して、神の恵みを覚えるように勧めました。そしてこれまで教えられたことを思い起し、そこにしっかりととどまり、敬虔に生き続けるように勧めました。そして「終わりの時」を見つめつつ、今を誠実に生きる大切さも教えました。
- ・神のみことばを聞く私たちに、聖霊は働いてくださり励ましを与えて、困難

な状況の中でも希望を見出し、信仰を持って立ち上がることを勧めています。一方、異端の勢力の存在にも警戒するよう呼びかけています。

- ・異端の誘惑に負けてしまった彼らも福音を聞き、神の愛を受け入れた人々でした。しかし彼らはみことばによって自分の生活を省みることや、自分自身を変えたいとは願いませんでした。イエスはみことばを聞いても、それを行わない者の「種蒔きのたとえ」を語られました。聞いても行なわない者の愚かさを語られました。ヤコブの手紙1章に次のように述べられています。

1:22 みことばを行う人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者となつてはいけません。

- ・3節、4節を注意して読むならば、信仰から外れていった人々の姿があげられていることが分かります。それは「自分たちの欲望に従いながら」、「嘲り」、「疑い」などです。ペテロの勧めを聞きながら、彼らは自分流の生き方を貫こうとしました。そしてこう言いました。

3:4 こう言います。「彼の来臨の約束はどこにあるのか。父たちが眠りについたら後も、すべてが創造のはじめからのままではないか。」

- ・これは聖書の約束、みことばに対する疑いであり、また神の存在とその導きに対する疑いでもあります。人間の歴史の中で、神の摂理を認めるか否かという問いです。
- ・私たちは、人生で神の摂理を気づかないことがあります。  
神の摂理はいつも劇的なことばかりではありません。人生の中で、さりげなく、自然な形で一人ひとりに備えられてきた神の摂理のわざがあります。それは私たちが信仰をもって見つめようとするとき、はじめて気づかされるものです。

## 2. 信仰を働かせなさい

3:4 こう言います。「彼の来臨の約束はどこにあるのか。父たちが眠りについたら後も、すべてが創造のはじめからのままではないか。」

- ・ペテロは4節でこのような声、すなわち「世界ははじめからこのままではないか」という声に、5節で反論しました。

3:5 こう主張する彼らは、次のことを見落としてしています。天は大昔からあり、地は神のことばによって、水から出て、水を通して成ったのであり、そして再びノアの洪水物語を取り上げて、こう述べました。

3:6 そのみことばのゆえに、当時の世界は水におおわれて滅びました。

- ・当時、文明が栄えた地域は、大河ティグリス・ユーフラテス川の沿岸でした。

現在のように治水工事などほとんど施されていなかった流域で、被害はきっと甚大であったと想像できます。現在も異常気候で、毎年のように日本はじめ世界各地で、大洪水の被害が報道されていますから、洪水物語は決して昔だけあった被害ではありません。

- そこで、大切なことがあります。それはノアの洪水を単に自然災害ととらえるかどうかです。私たちは聖書を開くと、神は大洪水の前にみことばによって、問題を提起し、滅びを警告されていたことがわかります。そこには教訓が伴います。
- 神はノアの時代、その地に住む者たちの、目に余る不道徳に対し悔い改めを求めておられました。しかし、その警告を軽くとらえ、最後まで無視した人に対して神はさばきを行われたのでした。神は歴史の中に介在されたお方であり、これからもそうであるというのがペテロの反論です。
- 神の摂理のみわざを、私たちが認めるか否かということです。それは私たちの人生の中で、神の摂理を見つめるかどうかという問いとも重なります。

#### 『黒田の例話から』

- 私のこれまでの生涯を振り返ると、私がこれまで歩んだ道から、私は確かに神の摂理の内に置かれていたことが分かります。神の召命をうけて献身し約44年の年月が過ぎました。これまで、私はじつに多くの神の祝福をいただいてきましたが、その中の一つを特に思い出しています。
- それは旧ソ連、旧東欧の人々との不思議な出会いから始まり、鉄のカーテンへの伝道をさせていただいたことです。自分には、その勇気も力も資金もありませんでした。しかし、神は無神論社会で生きた「神の生き証人」たちとの出会いを備えておられました。
- あの使徒パウロのような器に出会い、若い私は身震いしたことを覚えています。そして、この働きが、今の「ミッション・宣教の声」の働きへとつながっていきました。
- 他にも、振り返るならばじつに多くのことがありました。しかし、考えてみれば、私の人生は「ある一本の線上」に置かれていたことは確かです。それは神の摂理です。私が引いた線ではありませんでした。神が引かれた線でした。そして、その道は本当に幸いな道でした。
- 神はこのことをあらかじめ知っておられ、その先から私を見つめ支え、導いてくださいました。今、多くの経験をふまえて言えることは、この聖書の神を信仰をもって受け入れ、お従いすることの大切さです。信仰とは、そのようなものであります。
- 愛する兄弟姉妹も、どうぞ信仰を働かせて神を信頼し歩んでください。

ま と め
-------

主 題：「神の摂理を見る目」

—みことばへの信仰—

・今朝も、私たちの主はお語りくださいました。私たちは何も覚え、どのように歩むべきか教えてくださいました。ここでまとめてみましょう。

1.神の恵みを覚えて歩みましょう

2.信仰を働かせて歩みましょう

へブル人への手紙 1 1 章

11:1 さて、信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるものです。

\* God bless you !